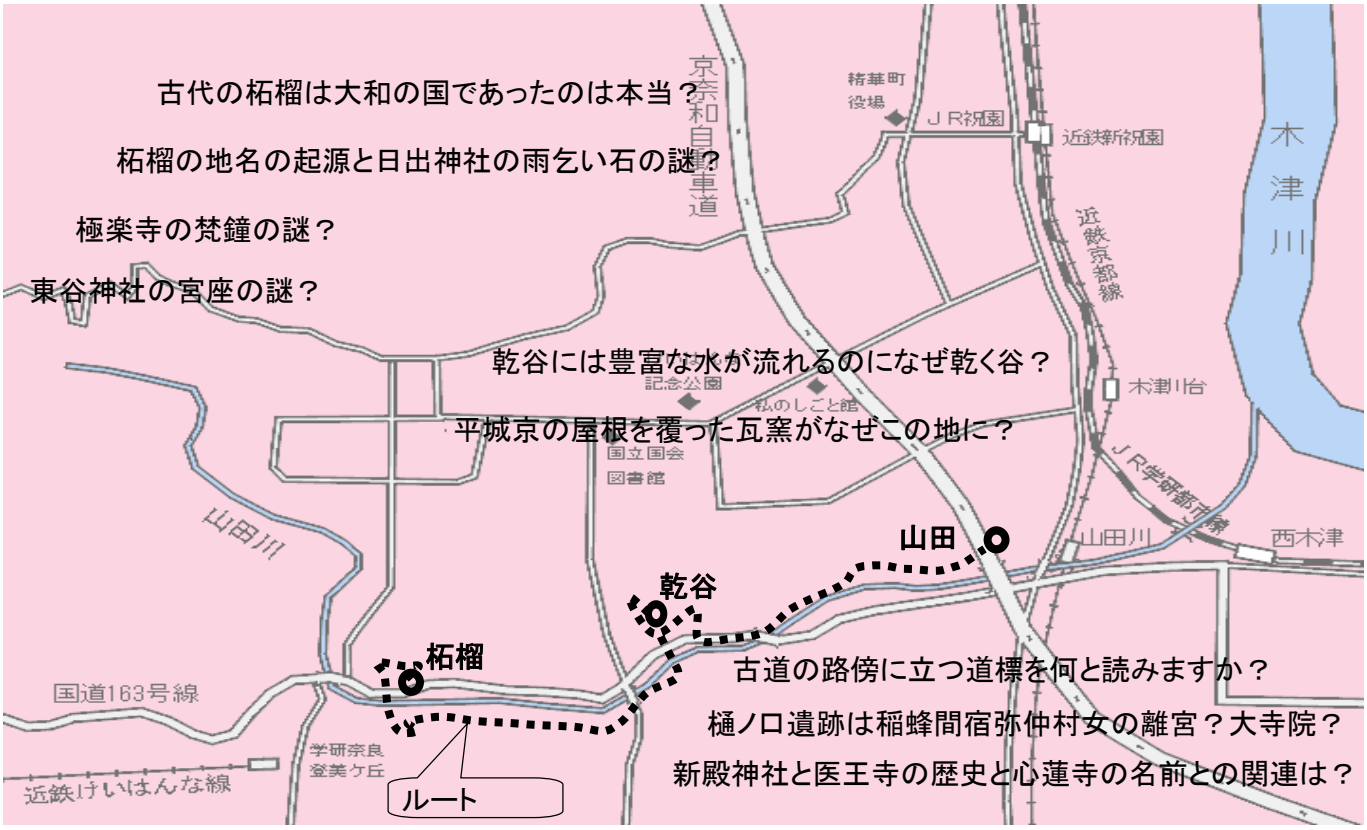
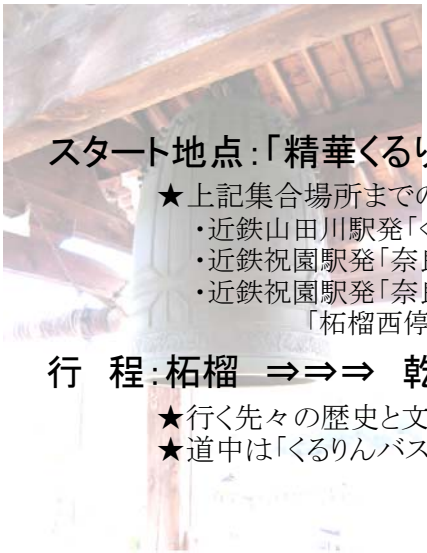
山田川流域の里を
歴史と文化財の謎を探りながら歩く





スタート地点：「精華くるりんバス」柘榴停留所

★上記集合場所までの交通手段

・近鉄山田川駅発「くるりんバス」⇒柘榴下車

・近鉄祝園駅発「奈良交通 光台八丁目経由 学研登美が丘行きバス 41番」⇒柘榴西下車

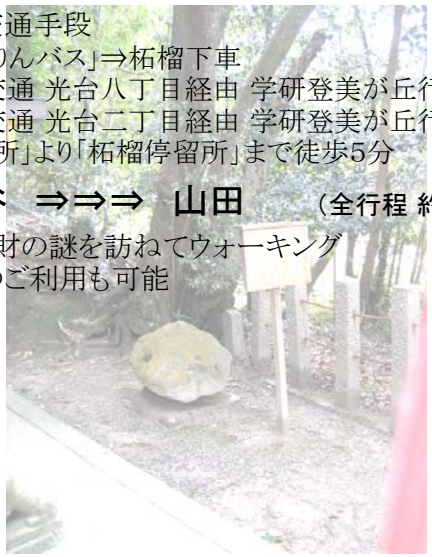
・近鉄祝園駅発「奈良交通 光台二丁目経由 学研登美が丘行きバス 47番」⇒柘榴西下車

「柘榴西停留所」より「柘榴停留所」まで徒歩5分

行　程：柘榴　⇒⇒⇒　乾谷　⇒⇒⇒　山田　（全行程 約4km）

★行く先々の歴史と文化財の謎を訪ねてウォーキング

★道中は「くるりんバス」のご利用も可能



① 東谷神社　柘榴垣内124

東谷神社の全景

由緒や創建年代は不明ですが、神殿背後の森の中に残る朽ちた土塀が、古くから村の大切な守護神として永らく崇められてきた歴史を物語っているように思われます。

この社には村人の篤(あつ)い信仰心から宮守を筆頭とする宮座が今も残っており、古式に則った年中行事が続けられ、以前は宮守が神主の役割を果たしていた事が解ります。

江戸時代には東谷神社の神宮寺として「見性寺」があり、「東谷神社の宮座行事」は、享和二年（1802）の記録によれば見性寺の行事として、正月二日の牛玉札の配布、正月六日の勧請縄掛け、二月五日の御弓二月八日と八月八日の大般若経と、毎月の法華経読経などが行われていました。神仏分離によって神宮寺は整理されましたが、その宮寺の年中行事は宮座行事に組み入れられて今も受け継がれているのです。

社殿裏の朽ちた土塀

帰路に、柘榴の集落の家々の甍(いらか)の重なり合った、温もりのある美しさをご覧下さい。

② 極楽寺　柘榴垣内71

参道の石段の南側斜面に祀ってある、光背付きの無数の無縁仏が無常観を漂わせ寺院らしい雰囲気を一層高めています。また、鐘楼の傍から見下ろす山田の風景は一幅の絵である。

寺の創立の時期は不明ですが、元禄16年（1703）や享保17年（1732）のこの寺の什物に仏画があることから、江戸時代の半ばにはすでに存在していたと考えられます。

無縁仏のある斜面から鐘楼を見上げたところ

鐘楼の傍から山田を見下ろしたところ

梵鐘は京都府指定文化財で、鎌倉時代に遡る貴重な鐘の一つです。刻銘から、応長2年（1312）2月に僧定意が山田医王寺に寄進したものです。医王寺は山城国一揆後に衰退してしまったものと推測されます。

極楽寺に保存されている山田医王寺の梵鐘。現在の極楽寺の鐘楼に釣り下げられている梵鐘ではない。（写真提供：精華町教育委員会）

阿弥陀如来坐像　1軀

観音・勢至の両菩薩が侍る、江戸時代の作です。

薬師如来坐像　1軀

室町時代の作か？

③ 日出神社　柘榴向井109

この神社では、先ほどの東谷神社との両社から、古くからの日本人の持っていた神の居場所・神の姿・神の力等々の多様性について、考えて頂くよい機会になると思います。

日出神社の社殿

雨乞い石

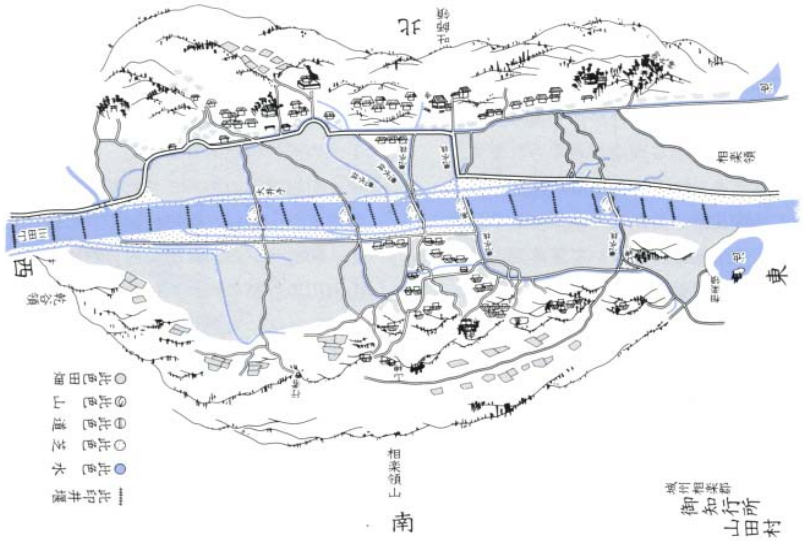
日出神社は、奈良県生駒郡に鎮座されていました。延暦年間（782～806）に御神体の大石がここまで流れ着き移座し、「神石」と呼ばれて社殿の傍らにあります。

現在は「雨乞い石」ともいわれ、旱魃(かんばつ)時には山田川まで持ち出してこれを川の中に入れて祈願すると、必ず雨が降ると言うことで近郷にも知られていました。また、この石には、光明皇后にまつわる伝説があります。

参拝後、鳥居の前の池の傍から生駒市鹿の台の市街地が遠望でき、向かいの里山の静かな佇まいと対比できます。また、山城と大和の国境の川に架かる両国橋も見えます。

④ 山田川井堰(ニューラバーダム)

江戸時代、山田川には17箇所の井堰(いぜき)が設けられて、灌漑用水を引き耕地を潤していました。上流の住宅開発等による洪水防止のために河川改修がされ、川床が掘り下げられたために敷設された、新しく珍しい形式(ダム式)の井堰です。



福井家文書にある江戸時代の井堰

山田川第六号井堰（上）とその銘版（下）

⑤ 乾谷・得所瓦窯

南面の山田川流域の丘陵には、奈良時代を中心に西から得所・乾谷・押熊・山稜・歌姫・市坂・梅谷等多くの瓦窯が広い範囲に点々と築かれていました。それはアトランダムに存在するのではなく、山城と大和を結ぶ何本かの谷筋の道沿いに纏(まと)まっていました。 その瓦窯群の一つの乾谷瓦窯は、この南側の丘陵の斜面の耕地と竹藪の中にありました。大きく硬い瓦を大量に生産する必要から、窯の中の温度を高めるため何段かの窯を連ね重ねたような(登り窯)方式が多かったようです。奈良時代、この丘陵は高級な瓦を生産するハイテク窯業地帯で、文化学術研究都市の奈良時代版だったのです。

得所瓦窯のあった辺りの丘陵

この地方がそうなった理由は何故でしょうか？

乾谷瓦窯のあったあたりの丘陵

⑥ 光明寺　乾谷北垣内127

開創の時期は不明です。寛政4年(1792)に焼失しましたが、同8年(1796)に僧知覚が復興しました。

城山を背に乾谷川から見た光明寺本堂

阿弥陀如来立像　1軀

形状は螺髪(彫出)、肉髻珠・白毫(水晶製)をあらわし、来迎印を結んで立つ像です。観音・勢至の両菩薩を従えています。品質は、寄木造、漆箔、玉眼嵌込で、像高83．0cm。江戸時代の作。

弘法大師坐像　1軀

品質は木造(ケヤキ)、彩色。像高37．6cm。背面の内刳り内部多くの遺髪とともに文化7年(1809)の願文が納められている。

他に、墓地内に延徳3年(1491)に念仏一揆結衆17人によって造立された旨の名号板碑があります。

地蔵菩薩立像　1軀

形状は、剃髪し、白を表す像。両手先が欠失しているが、右手を胸前に挙げ、右手垂下して立つ。品質はヒノキの寄木造、漆箔(肉身部)。頭部は後補と思われ、体部は平安時代後期(12世紀)か？

⑦ 龍王神社　乾谷金堀

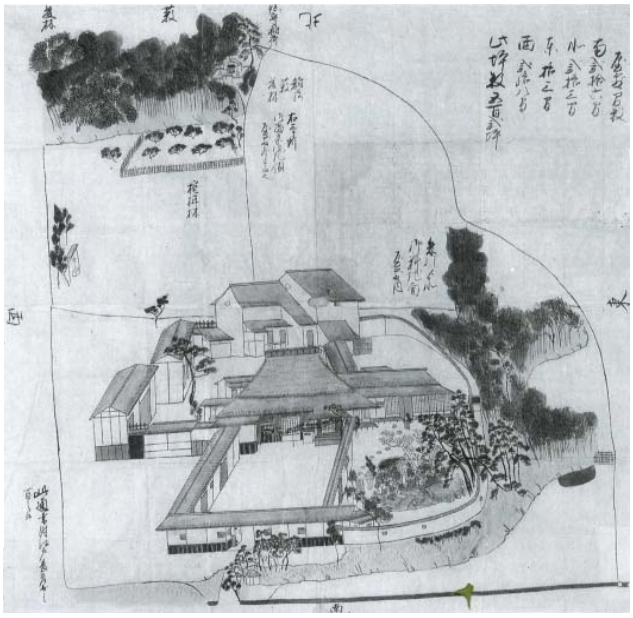
丘陵斜面右下から見た龍王神社

龍王四天王は農耕に必要な雨と水の神。元は個人の家で祀られていた。後に断絶で放置され洪水後荒廃していたが、昭和22年山田荘小学校の奉安殿の建物を本殿として使用し再建された。

⑧ 山田の代官福井家の屋敷図

江戸時代に、村役人組織の上に在地の有力者を代官に任命して知行地の管理を任せる在地代官制度を採った領主もあった。その在地代官として山田村を9代に亘って務められていた福井家の屋敷で、最近屋敷の外周りを修理されました。福井家は江戸時代の村の関係文書類を多く保存されていて、近代史研究者には宝の山となっています。

この辺りの道の左側の溝にはきれいな水が満々と流れ、気持に安らぎを覚えます。



⑨ 江戸時代の道標

右 「きづ」、「右きすい可（木津伊賀）」。左 「大坂」、「左はせみち（土師道）」とあり、明治まで「大坂道」と呼ばれ、大阪と伊賀を結ぶ街道であったことを物語っている。

今は、国道163号の旧道です。

⑩ 西念寺　山田樋ノ口61

当寺は近年新築されており、門を入ると端正な前庭が迎えてくれます。寺は宝治元年（1247）、僧南嶽の開基と伝えられていますが、文政5年または天明年中（1781～89）に焼失して、寛政3年（1791）僧観道により再興されたと言われています。

明治11年（1878）に近くの観勝寺が合併されました。明治維新の寺社整理のあおりでしょうか？

また、当寺院は江戸時代末から明治期に成立した城南33箇所巡りの一つに数えられていた。城南33箇所巡りは南山城33箇所巡りに次いでできたものです。

西念寺の本堂

当時は西国33箇所の巡拝が広く行われていたが、西国に出かける時間的経済的余裕のない人のために、近辺の霊場を回る2系統の組織が生まれていたようです。

本尊・阿弥陀如来像　1軀

形状は、螺髪（彫出）、肉髻珠・白毫（水晶製）をあらわし、来迎印を結んで立つ。品質は、寄木造、金泥（肉質部）・金箔（着衣部）、玉眼嵌入。像高99．5cm。江戸時代の作。

⑪ 普賢院　山田樋ノ口1

門前に「不許酒肉五辛入門内」の碑があり、創建などは不詳ですが、明治16年近くの長福寺を合併しています。以前は寄棟造のお堂と庫裏もありましたが、ともに朽ち果てたので、10年ほど前にブロック建の祠をつくり仏像類を収蔵されました。

当院の域内に入ると神域・寺域のどちらでもない霊感が漂う独特の雰囲気を持つ院域となっています。

普賢院の祠の内部

不動明王坐像　1軀

形状は、中存は斜髻を結い、左前に辮髪を垂下し、天地眼・牙上下出の相とする。羂索・宝剣を執り、座す。左脇侍（矜羯羅童子）は合掌し、右脇侍（制多迦童子）は左手を挙げ右手に宝棒を執る。品質は木造、寄木造、彩色、玉眼嵌入。像高87．2cm（不動）、97．2cm（矜羯羅）、94．8cm（制多迦）。

普賢菩薩坐像　1軀

形状は宝髻を結い、白毫（欠失）をあらわし、左手は胸前で第一・三指を捻、右手は臂先が欠失している。坐像。品質はヒノキの寄木造、漆箔。像高59．8cm。

阿弥陀如来坐像　1軀

形状は解体状態で当初の部分が残っているのは頭部前面だけ。品質はヒノキ造、漆箔、彫眼。像高49．8cm（後補部を含め）。頭部前面は鎌倉時代（13世紀）、体部のうち胸部は中古、両足部は近古の補作である。

⑫ 樋の口遺跡　山田樋ノ口地内

京都府教育委員会は稲蜂間宿禰仲村女の本拠地に関わりのある離宮跡説か、興福寺の官務蝶蔬に載っている山田寺跡の両方どちらかである、と結論付けをしている。

遺物には、土師器・須恵器・二彩三彩の鉛彩陶器・白磁・瓦等がみられる。

寺院説のサンデンジと山田寺・心蓮寺や新殿神社の関係はあるのか謎である。

離宮跡？、寺院跡？（写真提供：精華町教育委員会）

⑬ 新殿神社　山田医王寺3

古くは植樹神社と称していた。 参道には文政12年（1829）の石灯籠があり、鳥居の奥に能舞台・拝殿と天文16年（1547）の棟札を残す本殿が並んでいる。山田寺や医王寺・薬師寺・鐘楼跡等興味深い謎？がある。謎の話に耳を傾けて頂きたい。

十三重の石塔　1基
重要文化財。（写真真ん中）
室町時代の作である。

薬師如来坐像　1軀
江戸時代の作。

鳥居の向こうに見えるのは能舞台

十三重の塔

医王寺鐘楼址の碑

エチケットを守りましょう！

☆　交通ルールの遵守

☆　ゴミは捨てずに持ち帰る

☆　通り道の草花は絶対に摘み取らない

☆　トイレ等へ行ったり、途中で帰る場合は
　　必ず引率者に連絡する